

## 2023年度けいじゅヘルスケアシステム業績集発刊にあたって

2023年度も、5月に5類感染症になったとはいえ新型コロナウイルス感染症は医療・介護の現場では極めて大きな関心事ではあった。しかし、Teams上に作成した「感染対策クロノロジー」と現場への適切な意思決定によって、感染症に対して強靱な（レジリエンス）組織を構築してきた。

そして、2024年1月1日16:10に発災した震度7という未曾有の巨大地震「令和6年能登半島地震」に、われわれの医療介護福祉施設が被災した。基幹である恵寿総合病院は、これまでBCM/BCPとして整備してきた建物（地盤改良、免震）、上水と井水の利用、2回線受電、避難経路、物資供給などの二重化対策に加えて、被災したにも関わらず医療を守った多くの職員の頑張りが功を奏して「災害でも医療を止めない」病院として、発災直後より、能登地域で唯一、救急医療、手術、分娩、検査をフル機能で維持することができた。強靱な組織がここでも機能したものと自負する。

このわれわれの軌跡は、Teamsに一本化した非常事態報告をはじめとした膨大な資料をまとめ、年度末である3月31日までの記録として、この業績集で「能登半島地震クロノロジー」として収録する。これは、震災における初期対応記録として私たちの行動の検証に供されるとともに、他地域における震災対応の事例としての資料となるに違いない。今後、2024年第2四半期以降に、震災対応と復旧、復興の記録として、さらには、いただいたご支援、ご厚志への感謝を込めた記録の作成を図りたい。

震災からの復旧は、グループの介護保険施設、福祉施設で、その立地と構造の面から難渋している。一部の施設は、復旧させることなく、近隣のグループ施設へのサービス統合を図り、放棄せざるを得ないという決断をした。利用者にはできるだけ迷惑を掛けないようサービス体制の見直しに注力したい。

また、能登地域全体の復旧、復興は、さらに遅々として進みが遅い。いたずらに、元通りにする復旧ではなく、これからの人口減・高齢化社会に対応した地域づくりのランドデザイン策定が早期に必要だと考える。地域医療支援病院である恵寿総合病院を、能登地域の医療体制でHub病院化させるべく地域連携、人材連携、医療介護連携をさらに進めていきたい。

私たちのDXの取り組みは、効率化と働き方改革、医療の質向上といった視点で2023年度も進めてきた。特に、年度初めの4月に恵寿総合病院における業務用iPhone 520台導入では、病院における仕事の文化そのものの大変革となった。スマホでのカルテ記載、強力なセキュリティの下での院外でのカルテ参照はもとより、内線固定電話は消え、チャット文化やセル単位の多職種協働も進んだ。また、AI元年として、働き方改革に資するAI診療記録要約や医療の質に資するAI画像診断導入の布石が打たれた。

業務用iPhoneは震災直後の仮設病棟設置などの場で、災害時のBCPとして極めて効力を発揮した。当初は2023年度中の介護保険施設への導入予定であったが、震災対応で遅れた。2024年度には介護DXの柱として導入を進めたい。

昨年度、金沢市南新保に土地を取得した恵寿金沢病院移転計画は、能登半島地震による能登地区の施設復旧工事のため、一旦、休止した。今年度内に、事業計画の再構築を図りたい。



2024年6月吉日

けいじゅヘルスケアシステム 理事長

神野 正博